

こころねっと



福井大学国際センターネットワーク誌
Spring 2024 vol.24

グローバル化って何でしょうね？ ー世界のどこに行っても同じ？ー



2023.8 喜望峰にて

NAGAI, Niro (永井 二郎 Japan)
副学長 (国際担当) 国際センター長&語学センター長
工学系部門機械工学講座 教授

2023年4月にほぼ突然、国際担当の副学長に就いて以来、どうしても「グローバル化」「国際化」「ダイバーシティ (多様性)」などの用語に触れる機会がぐっと増えました。留学生の皆さんは、生まれ育った母国を離れて異国である日本で暮らし勉強・研究していて、私よりも実感として「グローバル化」を日々意識していることと思います。ざっと調べてみると、私はこれまでに65回、海外旅行 (大半が出張) していました。本稿では、私の経験から「グローバル化って何か？」について考えてみたいと思います。結論を先に述べると、極論すれば「グローバル化とは世界のどこに行っても同じ (と感じること) だ」というのが私の意見・感想なのですが、皆さんはどう考えますか？

65回の行き先で最も多い国はアメリカでした。次に多いのが韓国と中国で、意外に多かったのはUAE(アラブ首長国連邦)で7回です。これら海外旅行の多くは、私の研究分野 (伝熱工学) に関する国際会議参加のための出張ですが、韓国と中国へは交流協定のある大学間で企画した大学院生向けの国際シンポジウム参加が多かったですし、UAEへは太陽熱淡水化の実験を行うため集中的に出向いていました。ちなみに、20数年前の新婚旅行はハワイ (アメリカ) でした。

20歳～30歳代の若い頃は、見る物・話す人・聞く音・感じる雰囲気すべてが新鮮で、それこそ寸暇を惜しんで出歩きました。少々危ないエリアや妖しいお店に入ったりして、今から思うとよく無事だったなと思うこともたまにありました。国によって、文化・宗教・言語・習慣 (常識) が異なり、バスや電車などの公共交通機関にのるだけでも日本との違いを強く意識させられます。皆さんも、日本 (特に福井) に来てから、母国との違いを感じているのではないのでしょうか。

私が最も長期間にわたり外国に滞在したの



2000.10 UCパークレーにて

は、2000年10月から2001年8月まで、バークレー市(アメリカ)に住んだ時です。文部科学省の在外研究員という夢のような制度の恩恵で、カリフォルニア大学バークレー校に10ヶ月間、共同研究をする機会をもらったのです。妻と二人で、大学近くの一軒家の2階を借りて生活しました。右の写真は、キャンパス内で撮った私の写真ですが、文頭の写真(去年、南アフリカの喜望峰で撮ったもの)の私とは大違いですね(若い!)。大学での研究者間の交流は、普段の国際会議の時と似たようなものですから、特に違和感は無かったのですが、日常生活を送る際に日本との違いを強く感じました。例えば、私達が住んでいた家のお隣に60歳代の女性が暮らしていて、私達は彼女と友人になりました。日々の会話や時々一緒にとった食事や小旅行において、私は彼女を通じてアメリカ人(のごく一部の人)の考え方や習慣を学び、逆に、自分自身のことや日本人の思想や習慣を相対的に捉える機会を得ました。

このように、私はこれまで外国と日本との違いを感じる機会が多くあったのですが、だからこそ思うのは、「結局、どの国に行っても、日本にいても、本質的には大きな違いが無いのではないか?」ということです。違いはあるんです、もちろん。ただ、どの国もほとんどの人は、家族がいて、食事をとり、友人とは楽しく語り笑い、仕事でつらい時にはグチをこぼし、嫌な出来事に遭遇すると落ち込み、でも何となく周りの人とは平和に接したい、と考えていることに気がきました。そこには文化や宗教の違いは影響が無いように私には思えます。私が理想と思うグローバル化社会とは、地域ごとに文化・宗教・言語・習慣等が異なったまま、世界中の人々が自由に希望する地域で当たり前のように生活・仕事ができるような社会です。オーバーに言うと、国境が無い社会です。私は今から50年程度経てば、世界はこういう社会になると期待していますが、この話をある会社の社長にしたところ「永井さんはメルヘンだね~(つまり、考えが甘い)」と言われました。自分でも甘い人間だと自覚していますが、でもいつかきっと本当の意味で「グローバル化」が実現することを願いつつ、福井大学の国際交流が活発になることに少しでも貢献したいと思います。留学生の皆さんも、卒業後もぜひ福井大学とのつながりを維持してもらい、「グローバル化」に向けて一緒にがんばりましょう。

日本での留学の経験



Mohd Syahmi Bin Addi Saiful Rizal Voon (Malaysia)

工学部 電気電子情報工学科

私は、福井大学に編入する前に、高専で3年間勉強してきました。日本についたばかりの、2019年4月のころ、マレーシアの気候の暑さに慣れた私はすごく寒い季節が苦手で、嫌でした。4月は春であるはずですが、そ

れでも私は耐えられず、嫌でした。

高専に途中から入ったことで、友達を作るのもすごく難しかったです。国では常に友達に囲まれていた私が、初めて教室へ一人で移動したり、朝から夜までの食事を一人でしたり、教室の中にいるときずっと一人ぼっちだったりしました。また、電気工学の専門知識が足りず、自分で教科書やネットの資料で勉強しないといけませんでした。最初の数ヶ月は勉強しませんでした。先生やチューターも色々指導してくれて、すごく助かりました。



高専に入ると、人生で初めての寮生活でした。運が悪いといえるかもしれませんが、相対的に厳しい寮に入ってしまった。週末を含めて毎晩、勉強しないと聞けない静粛時間や、早すぎる点呼の時間などのルールが多すぎました。また、日本についたころの日本語のレベルが低く、周りで使われていた方言の影響もあったか



もしれませんが、先生や同級生が話す日本語はほぼ聞き取れず、自分から話してもうまく通じなかったです。

日本での最初の生活はほとんどうまくいかなかったですが、どんどん慣れてきて、周りの人とのコミュニケーションを取れるようになり、友達をすることもできるようになり、日本での生活がより

楽しくなっていました。

日本に留学したおかげで、様々なことを体験できました。日本の丁寧に保持されている自然や、綺麗な四季や、独特な文化や、四季がある国でしかできないス

ノーボードなどを体験してきました。また、様々な国籍の人と出会え、様々な文化を経験することにより、考え方や視野を広めることができました。留学しなかったら、私はそのまま成長しなかっただろうなと今でも思います。日本語を全然喋れなかった私が喋れるようになり、一人が嫌な私が一人の時間を大切にできるようになりました。



最初は、日本に留学したことを後悔しましたが、今は日本に留学できてすごくラッキーだったと思っています。もし過去に戻ったとしても、また日本に留学したいと思います。



留学生として日本で体験したこと



Wynsom Filbert Wiyarta (Indonesia)

工学部 建築・都市環境工学科

日本に留学してからほぼ5年になりました。福井大学に入学する前に大阪で日本語学校と専門学校に通いました。大阪は大都市でショッピングセンターが多いし、府内と観光地への交通機関も整っているし、大阪に住むのは非常に便利です。出身地のインドネシアにあるマカッサルはそんなに大きくない街で、ショッピングセンターは整っているが、電車が全くないので、人々は普段自動車で移動します。ですから、日本に来る前に電車をほぼ使わなかった自分が毎日電車を使ってみると、やはり自動車より便利です。

福井に来てから、多くの人々が車で移動するのにびっくりしました。実は、まだ大阪に住んでいたとき福井のことは全く知りませんでした。当時の自分は、日本の都市だったら、交通機関があまり発展してなくて、車で移動する人が多い福井のような街はもうないはずだと思っていました。また、大阪は雪がほぼ降らないので、日本の本州にある街には福井のような雪が多い街はないと思っていました。

福井の街について知ったきっかけは専門学校で行われた福井大学のセミナーに参加したことでした。そこから福井大学に編入することに決めました。福井は大阪に比べて、地下鉄がなく、交通機関があまり整ってないが、自然が非常に豊かな街です。去年は福井大学の国際ボランティア部活の友達と一緒にエコーランニングツアーの



活動で、福井県の大野市にある和泉スキー場で間伐作業の見学及び体験や、間伐材の活用の見学や山保全の現場の様子を見学しました。このツアーをきっかけに自然の近くに住んでいる人々の生活を学べ、大阪のような大都市ではなかなか見られない自然を楽しみました。

自然が豊かなこと以外に、福井の特徴は毎年雪が多いことです。福井に長く住んだ友達から聞いた話では、大雪になると歩きにくくて、靴も濡れやすく、面倒くさいと言われましたが、熱い国から来た自分は雪で遊ぶのは小さいころからの夢の一つです。初めて大雪を体験したのは去年の12月です。当時は朝に授業があるので、午前6時ごろに起きて、普通のスニーカーで雪の景色を楽しみながら、雪遊びをしました。ブーツをはかないため靴と靴下がビショビショになって、完全に濡れてしまいましたが、とても楽しかったです。今まで何回も大雪を体験しても、まだ大雪を待って、楽しみたいです。

日本に来る前に日本は東京や大阪のような大都市ばかりのイメージを持っていたが、やっぱり日本は広くて、各都市の雰囲気の違い、それぞれ特徴を持っています。日本では大阪のような雰囲気や福井のような自然や雪など、様々なことを体験できます。



福井大学は冒険の始まり



Mark Patterson Anak Tinggom (Malaysia)

工学部 電気・電子情報工学科

福井高専から福井大学に編入した私は、通算でもう4年間福井に住んでいます。この4年間に色々なことを経験しました。

福井大学に入学したときに、知り合いが居てよかったです。私は一人じゃなく、一緒に大学生活を楽しむことができる人々に囲まれていました。一緒に勉強したり、食事したり、遊んだりすることができました。

留学生として、福井大学の留学生サポート制度は素晴らしいと思います。悩みがあれば、福井大学の国際課から積極的に助けてもらうことができます。そのおかげで、留学生たちは福井に快適に住むことができます。

そして、関心した設備は、福井大学のグローバルハブです。その場で留学生と日本人学生は自由に交流することができます。定期的にイベントもあります。参加したことがあるイベントは、イースターイベント、夏祭りイベントとクリスマスパーティーなどです。色々な学生と話したり、遊んだりすることができるのは、とても楽しかったです。

僕は福井大学に入ってからマレーシア人留学生団体の会長を務めています。会長としてマレーシア人留学生と一緒に色々なイベントを行いました。ピクニック、バドミントン大会、先輩の送別会などのイベントで、私たちマレーシア人留学生には強い繋



グリーンセンターでのピクニック



先輩の送別会

がりがありました。

これからも福井大学で後悔なく幸せだけの生活を送りたいです。やっぱり人生はしんどいですが、周りの人々に笑顔を届けられるような人生を送りましょう。

どんなことが起こっても、タフに生きてやりましょう。

福井での思い出



Nor Anisa Binti Mohd Hasri (Malaysia)

工学部 物質・生命化学科

私が毎年楽しんでいる季節は冬です。なぜならば、マレーシアで生まれ育った私がよくドラマとか映画でしか見れなかった雪が実際に体験できるようになったからです。除雪が面倒で嫌な人がいるかもしれませんが、私はいつも雪で遊びながら楽しんでいます。

冬といえば、スノーボードやスキーが欠かせない話だと思います。私が初めてスノーボードをしたとき、うまくできなくて何度も転んでしまいました。しかし、諦めずに練習を続けた結果、少しずつできるようになって、次の冬がくるまで待ちきれないくらい楽しくなりました。

毎年、福井のマレーシア人コミュニティのみんなと時間を合わせて一緒にスノーボードに行くのですが、そこで仲間と楽しい時間を過ごすことができます。これからも、スノーボードだけでなく色々なアクティビティで仲間と楽しみながら、過ごしていきたいと思います。

福井の冬は、マレーシアでの暮らしとは全く違う、特別な経験です。雪景色やスノーボードの楽しさ、仲間との楽しい時間など、福井にはたくさんの思い出があります。帰国した後も、福井で作った思い出を大切にしたいと思います。



福井大学での異文化体験 —笑顔と温かさに包まれた学びの旅—



Gong ShuJuan (龔書鵬 China)

工学研究科 知識社会基礎工学専攻

はじめまして、私は中国からの Gong ShuJuan と申します。今年大学院 1 年生として、福井大学に在学しています。

福井は大都市ではありませんが、住民の皆様はとても優しく、温かい人が多いです。大学に通う度に、地元の人から暖かい笑顔で声をかけていただきます。これは東京とは全く異なる日常で、福井ならではの魅力だと思います。



金箔体験活動図

福井大学では、地域との強いつながりから様々な文化体験活動に参加する機会を得ました。2022 年には、北陸 3 県共同で開催された「JAPAN TENT」というイベントに参加しました。このイベントでは、金沢の伝統工芸である独特の金箔技法を実際に体験することができ、金沢文化の魅力を感じることができました。また、他大学の学生と意見交換をする有意義な交流会も行われ、日本文化をより

深く学ぶ機会となりました。

夏休みの間には、越前朝倉の「万夜灯」を見学しました。このイベントは、福井での水害からの復興と、ボランティアへの感謝の気持ちから始まりました。一乗谷朝倉氏遺跡も見学し、手書きの祈りの灯りも作成しました。さらに、多様な日本文化のパフォーマンスも楽しむことができました。夜になり、灯りが灯された景色はとても美しかったです。

私は元々、米作りに興味を持っていました。そこで、水稻作りの体験は忘れられない思い出となりました。5 月ごろ、実際の水田で苗を植える作業を体験しました。7 月ごろには、水田での雑草取りにも参加しました。秋には、稲刈りの作業を体験しました。そして冬には、最終的な米の収穫作業も実際に行いました。



万夜灯図

季節ごとに、水田作業の全工程に直接参加することができました。米作りの大変さを初めて実感する良い機会となりました。

これらの体験を通じて、福井の魅力と地域文化に多く触れることができました。大学生活を通じて身につけた経験と知識は、将来の人生の基盤となると思います。



田植えと稲刈りの図

私の旅してきた世界と福井



Khanzada Amil Mirza (U.S.A.)

工学研究科 総合創成工学専攻

はじめまして。

私は、福井大学大学院工学研究科博士後期課程1年のカンザダ・あみるです。

今まで、世界20カ国を旅してきましたが、現在は永平寺町に住んでおり、楽しくホームステイをしています。

出身はシリコンバレーで、University of California, Berkeley と Stanford University でソフトウェア開発を勉強しました。その後、医療AIのナッジ論(アジアへのマーケティング)を学ぶため、福井大学に入学しました。

今後は、人生をかけて社会貢献していきたいと思っています。

私の地元であるシリコンバレーは、



Google や Facebook、Apple、Yahoo など、世界を動かす IT 企業が数多く生まれた地域です。そこには、世界中からトップエンジニアが集まってくる、アメリカ国内でも特別な地域です。

家賃も高く、一部屋は月額平均で30万円程度もかかります！しかし、不思議なことにシリコンバレーは田舎であるため、福井県にも似ているように感じます。

雨がよく降るシアトルや、風が強いミニシリコンバレーと呼ばれるボストン、バットマンの街として有名なシカゴや、トランプ元大統領の地元のニューヨーク、温かいマイアミや、日本とアメリカの間のハワイ州も、研究で色々旅してきました。

その他にも、南米コロンビアやブラジル、アルゼンチンにも旅してきましたが、一番、よく訪れたのは赤道に位置してるコロンビア・ボゴタ市です。コーヒーやチョコレートが世界的に有名な土地ですが、その他にも様々な熱帯果物もあります。

毎日日本で熟したバナナなどを食べることができ、すごく美味しかったです。しかしながら、1900年代には頻りに内戦が起こっていた地域でもあります。現在でも、知らないタクシーに乗ると誘拐される心配があったり、歩きスマホをしたら襲撃される可能性があったりと夜遅くに街を歩くのは少し危険性があります。

数年前には中国北京市や香港にも旅をしました。両都市は安全で便利な土地でした。禅や気功や空手や漢方などの世界に資産を貢献した国として、尊敬しています。

中東（UAE、サウジアラビア）は石油が水より安いイスラム教の国で、肌に日差しが当たらない服装を身につけ、髪や肌を覆うなど、今まで訪れた国とは全然違いました。

ヨーロッパ（オランダ）に最初に行った時は One Young World という国際サミットに福井県地域大使として選ばれた時です。オランダでは、全世界 200 カ国から 2,000 人の社会貢献している若者や首相、ノーベル賞受賞者などが集まっており、大変刺激を受けました。よく旅してきた世界は、自分が思っていたよりもずっと大きいと知りました。



戦争中のアフリカから来た若者は、「子供の時に目の前で家族が殺された」と話し、インドから来た青年は、「村にトイレがないので、女の人は毎日危険を伴いながら川まで歩いて行かなければならない」と言う話や、「子供のときに親が私を奴隷として売った」などと言う驚かされる話を聞きました。

こうした話を聞き、私も世界貢献のために頑張らないといけないと覚悟しました。

今まで沢山旅をして来ましたが、その中でも私にとって一番居心地が良いのは福井県です。「なぜ、福井!？」とよく聞かれますが、福井県は幸福度ランキングが1番であったり、曹洞宗禅の道元が永平寺をここの地で設立した理由を含めて、非常

に特別な場所だと思っています。また、雰囲気もとても良く、人としての生き方も最先端であると思っています。

シリコンバレーで超人の様な人々に囲まれ、人として生きていくことを忘れてしまうほど頑張ってきた私にとって、自然豊かで人の優しさに触れ合える福井県に滞在し、福井大学の皆様と勉強できることは大変嬉しく思います。



Riding bike in India



Pargaian Janmajey (india)
工学研究科 安全社会基盤工学専攻

I have ridden many different types of bikes such as sports bikes, cruisers, adventure tourers in many different terrains and climates of India. I will tell you a bit about my adventures and give some advice.



Going for a 500 km ride at midnight.

The first thing I did before setting out to ride was deciding my gear and checking my bike. Before setting out to ride, I check my brakes, brake oil, tire pressure, battery functionality, clutch smoothness, headlight and taillights, indicators and anything I can possibly think of. My gear, tools and luggage would vary depending on the place I went to. When I was riding near my native place in the Himalayas, I packed, in descending order of importance: first aid box (always keep some first aid supplies with you); proper riding clothes and footwear, since it can rain

at any moment in the Himalayas and foot traction is necessary; food and water; and spare clothes depending on the duration of the ride. I also distributed my load evenly so that I could lean on corners without the fear of falling due to imbalance.

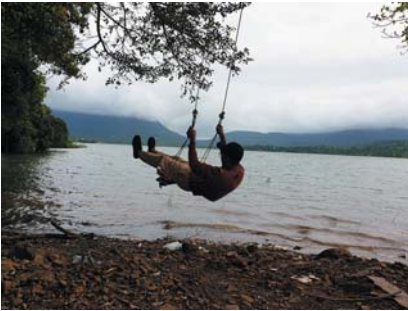
Most of the places I went to had excellent cell phone coverage, unless I were in the middle of big mountains which would block the network. After google maps, people were a secondary navigation tool for me. Fellow bikers also helped me out countless times. It is always better to



Greeted by horses in the lower Himalayas.

be on the safe side and download offline maps on your phone before going to places with little to no network connectivity.

You will meet all kinds of people on your ride. Whether it was highway riding or off-road trail riding, I met many different and interesting people. In the south of



Found a great place to rest next to a lake.

India, I was greeted by an old lady whom I had asked for directions. She was very happy that 2 young men from the north of India were out exploring her native place and fed me and my friend lunch free of cost! One other time, I was riding about 200 kilometers from my home and at a highway rest stop, I saw a bunch of guys on Harleys who turned out to be alumni of my high school.

Since we were going in the same direction, we swapped our bikes for some distance. It is important to have an open mind because only then will you be able to enjoy every moment and calmly face any difficulties.

I almost always have the throttle to a maximum and on highways, I rarely go below 120kmph. Despite this, I have never been in an accident because I follow basic safety guidelines which are now etched into my mind. Following proper traffic rules is the holy grail of riding. I have had many punctures in my tires while riding but after the third puncture or so, I started keeping a basic puncture kit on me as well.

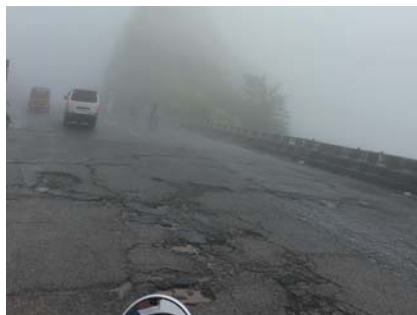
One of my favourite things about riding long distance was eating different kinds of food. In India apart from modern restaurants, we have traditional roadside restaurants called "Dhaaba (ダーバ)" where the food varies with the location. You will not find such tasty local cuisine anywhere else. I used to eat so much that I would doze off at the "Dhaaba" for an hour after eating.

The weather is your friend! Adverse weather conditions can be scary to some



Me crossing a hill because the road was damaged in a landslide.

and seductive to others. I personally love riding in heavy rain and hail, no matter the consequences, but I also slow down to an appropriate speed. Weather can tell you when you should stop, or it can be your hint to be brave and do something you haven't before. I recommend advancing one step at a time, slowly getting better at riding in adverse weather. However, **DO NOT RIDE ON ICE!** That is the biggest red flag in the history of red flags.



Bad Road and weather conditions.

Lastly, enjoy. You only live once so try different food, take a different road, stay in a shabby and third-rate hotel for a change, sleep in a tent on the side of the road, meet new people. Basically, do the things you wouldn't normally do. Riding is like a journey of self-discovery and can be a great stress reliever.



My buddy (wearing Crocs™), next to my bike in the Western hills of India.

My Job-hunting in Japan



Li Dingrui (李丁瑞 China)

工学研究科 知識社会基礎工学専攻

I am Li Dingrui, a first year graduate student in the graduate school of Engineering, specializing in Intelligent Systems. After completing my undergraduate degree, I worked for a while in a national construction company in China. However, feeling unsatisfied with the job, and facing challenges such as time zone differences and cultural disparities in Europe, I decisively quit my job. I then chose to pursue my interest in artificial intelligence in Japan, a subject I've been interested in since childhood. One advantage of studying science and engineering at my university is the ability to communicate with professors in English, rendering my Japanese language skills nearly irrelevant. Nonetheless, learning the local language is paramount, regardless of the country.

The primary reason for studying in Japan was to switch careers and find my ideal job. Thus, I started job hunting according to Japanese traditions, albeit somewhat confusedly at first.

The concept of job hunting was first introduced to me by Chinese classmates, who emphasized the importance of summer internships. However, possibly due to laziness and unfamiliarity with Japanese processes, I missed the opportunity for a summer internship. Then, in the latter half of my M1 semester, after attending several information sessions, I gained a better understanding of the entire process. At that time, my Japanese was not yet at a conversational level. So, it was a challenging semester, juggling my research project, learning Japanese, practicing speaking and listening, preparing for the N2 exam, and gathering all information related to job hunting. Although I had a rough idea of the job hunting process, the systems in Japan and China are vastly different, making progress bumpy.

Starting with the simplest task, the Entry Sheet (ES), I filled out about more than 30 times. Each company has its format, but they are quite similar and often ask why you want to work for them. Of course, I need a job to earn money and their

company is not bad, but you can't say that. You need to show that you are indispensable to each company (even though Japanese companies know you've applied to dozens and have the same words for each) and that you align with their corporate culture and spirit. Then we come to the web test, which is particularly challenging for international students, with its difficult Japanese language component, math problems (something like a brain teasers), and lengthy personality tests (the scariest part is if you want to match each company, you have to answer with different personalities for each). Following that, the most exciting part: the interviews. My first interview was with Sony for a winter internship, my top choice, but it was also my first interview. My Japanese was not fluent, and I was extremely nervous (it was the first time I spoke so much Japanese; I had prepared dozens of pages of notes around my computer, simultaneous translation and even two bottle of water). I could see a red blob in the video conference window (my face, red with nervousness). As expected, it didn't go well. After that, I felt demoralized for a while, not wanting to face the tedious processes and complicated formats. But what was the purpose of coming to Japan? Would returning to China make things any better? Or should I just settle for less?

Thank you very much for your application for our new graduate recruitment.

After careful and comprehensive consideration based on our recruitment policy, we regret to inform you that your application for this year's selection has been unsuccessful.

インタビューでは、李様のこれまでのご経験、お考えやご意向をお伺いすることができました。お伺いした内容を踏まえ慎重に検討を重ねた結果、今回は大変残念ながら貴意に添えない結果となりました。

Now, I'm still going through the process of submitting resumes, and although I haven't made it to a second-round interview yet, I feel like I'm getting the hang of it. The main round of job offers starts in March, and I hope a company will spot my potential by mistake.

The biggest harvest from this period is the significant improvement in my Japanese skills (although I still struggle with fast and lengthy speech). Job hunting in Japan is truly a headache, especially for international students like me who were unprepared; it's like a hellish difficulty level. But I also believe many international students have made extensive preparations, are fluent in Japanese, and excel in other areas. Regardless, it's important to persevere and keep pushing forward; perhaps this is part of what's referred to as "一生懸命" in Japanese culture.

A Culinary Journey: Unveiling the Secrets of Butter Chicken



Ajay Agarwal (India)

工学研究科 知識社会基盤工学専攻

Butter chicken, also known as Murgh Makhani, is a crown jewel of Indian cuisine. Its creamy texture, vibrant tomato gravy, and succulent pieces of chicken tantalize taste buds worldwide. But where did this delectable dish originate? The exact origin story remains shrouded in a delightful layer of mystery, with several interesting theories vying for culinary credit.

Tale 1: The Legacy of the Mughals

One theory traces butter chicken's roots back to the Mughal Empire, a period known for its rich culinary traditions. The Mughals, who ruled India from the 16th to the 19th century, were skilled at incorporating spices and aromatic ingredients into their dishes. Some believe butter chicken might be an evolution of dishes like Korma, which share similarities in the use of yogurt and creamy textures.

Tale 2: The Butter Chicken Revolution

Another theory points towards the iconic Moti Mahal restaurant in Delhi in the 1950s. Kundan Lal Jaggi, the restaurant's founder, is credited with creating butter chicken by accident. The story goes that leftover tandoori chicken was simmered in a creamy tomato gravy, resulting in the now-famous Murgh Makhani. While the truth might be debatable, Moti Mahal undeniably played a significant role in popularizing butter chicken across India.



Figure 1. (Left to Right) Kundan Lal Jaggi, and the first Moti Mahal restaurant (New Delhi, India)



Figure 2. The Dish that started it all - Butter Chicken, as often served in India

The Essence of Butter Chicken: Ingredients and Techniques

Regardless of its origin story, butter chicken's magic lies in its perfect balance of flavors and textures. Here's a breakdown of the key ingredients and steps involved in creating this delicious dish:

- **Chicken:** Traditionally, bone-in chicken pieces are preferred, as they add richness to the gravy. However, boneless chicken thighs can be used as a substitute.
- **Yogurt:** Yogurt acts as a marinade for the chicken, tenderizing it and adding a subtle tanginess to the dish.
- **Tomatoes:** Ripe tomatoes form the base of the gravy, providing a vibrant red color and a touch of sweetness.
- **Spices:** A symphony of spices is what truly defines butter chicken. Ground coriander, cumin, garam masala, and a touch of chilli powder create a warm, aromatic flavor profile.
- **Butter and Cream:** The stars of the show, butter and cream, contribute to the dish's signature richness and creamy texture.

The Culinary Canvas: Step-by-Step Guide -

1. **Marinate the Chicken:** Combine yogurt, lemon juice, ginger-garlic paste, and spices to create a marinade. Coat the chicken pieces in this mixture and



let it rest for at least 30 minutes, allowing the flavors to infuse.

2. **Cook the Chicken:** You can either pan-fry, grill, or bake the chicken pieces until cooked through. Traditionally, tandoori chicken is used, but any cooking method that yields tender chicken will work.
3. **Prepare the Gravy:** Sauté onions, ginger, and garlic in butter until softened. Add tomato puree or finely chopped tomatoes and cook until the mixture thickens and releases its oil.
4. **Spice Symphony:** Introduce the ground spices and simmer for a few minutes, allowing the aromas to bloom.
5. **Creamy Embrace:** Pour in cream or a combination of cream and milk. Adjust the consistency of the gravy to your preference – some like it thicker, while others prefer a more pourable consistency.
6. **Bringing it Together:** Add the cooked chicken pieces to the simmering gravy and let them simmer for a few minutes to allow the flavors to meld.
7. **Finishing Touches:** Garnish with a dollop of butter, a sprinkle of kasuri methi, and chopped fresh coriander leaves for a burst of color and aroma.

Beyond the Recipe: Variations and Accompaniments

The beauty of butter chicken lies in its adaptability. Here are some variations you can explore:

- **Spicy Butter Chicken:** Increase the amount of chili powder for a fiery kick.
- **Butter Chicken Tikka Masala:** Add a touch of garam masala and kasuri methi to the gravy for a distinct flavor profile.
- **Butter Chicken with Bell Peppers:** Diced bell peppers add a delightful sweetness and textural contrast.

Apart from these, Butter Chicken also has many regional flavors as depicted in the images below. All credit one of India's most famous chef, who has also appeared on MasterChef India - Chef Ranveer Brar !



Figure 3. (Top to Bottom, Left to Right). Bihari Butter Chicken from state of Bihar (North India), Hyderabad Butter Chicken from state of Telagan (South India), and the classic Butter Chicken, as served in Lucknow (the city which the author calls "home"), Uttar Pradesh (North India)

Butter chicken pairs beautifully with various accompaniments:

- **Basmati Rice:** The fluffy texture of basmati rice perfectly complements the rich gravy.
- **Naan or Roti:** These soft Indian flatbreads are ideal for scooping up the delicious gravy

So there you have it! With a bit of practice and this guide as your culinary compass, you'll be whipping up restaurant-quality butter chicken in no time, with a knowledge of this famous dish Japan loves. Remember, while the recipe provides a framework, don't be afraid to experiment! Adjust the spice levels to your preference, add your own creative touches, and most importantly, have fun in the kitchen. After all, butter chicken is not just a dish; it's a culinary journey waiting to be explored. So, fire up your stove, gather your loved ones, and prepare to embark on a delicious adventure with the magic of butter chicken!

留学生在学状況

(2023年10月現在)

	学部生				大学院生					科目等履修生／研究生／特別聴講学生／特別研究学生				合計
	教	医	工	国	教修	医博	工修	工博	国修	教	医	工	国	
バングラデシュ						1	1	3				2		7
カメルーン								1						1
カンボジア			4											4
中国			6	1	1	1	13	18	3	10		10	5	68
コンゴ民主共和国			1											1
チェコ													1	1
グアテマラ										1				1
香港							1							1
ハンガリー													1	1
インド							2	1						3
インドネシア			1					3				3	1	8
ケニア								1						1
キルギス							1							1
韓国			4	1						1		4	5	15
マレーシア			19	7			1							27
メキシコ										1				1
モンゴル								1						1
ミャンマー										1				1
ナイジェリア							1							1
台湾			1				1	1				2	18	23
タイ					1									1
アメリカ合衆国								1				2	1	4
ウズベキスタン								1						1
ベトナム							1			2			3	6
合計	0	0	36	9	2	2	22	31	3	16	0	23	35	179
							53							
	45				60					74				

地域社会との交流活動

— Local Community Exchange Activities —



230402 FCIA さくらウォーク



230409 FCIA しゃべり場



2305-2402 FIA 日本語常設講座



230514 FCIA しゃべり場



230521 田植え体験 (高須城山・農と人の会)



230521 田植え体験 (高須城山・農と人の会)



230521 田植え体験(高須城山・農と人の会)



230521 田植え体験(高須城山・農と人の会)



230527 FCIA しゃべり場



230611 FCIA しゃべり場



230617 FIA おちゃっとサロン「韓国」



230701 FIA おちゃっとサロン「中国」



230715 FCIA 浴衣で養浩館ウオーク



230729 FIA おちゃっとサロン「ポーランド」



230806 FCIA しゃべり場



230819 FCIA 万灯夜ツアー



230826 FIA おちゃっとサロン「中国」



230903 FIA 外国人コミュニティリーダー



230910 FCIA しゃべり場



230924 FCIA 通訳ボランティア研修会



230924 FCIA しゃべり場



231022 FCIA 着物体験



231022 FIA 福井国際フェスティバル



231119 FCIA ワールドキッズ「チェコ」



231202 FCIA メキシコ紹介



231216 FCIA ワールドキッズ「グアテマラ」



240107 FCIA クッキングワールドツアー



240212 FCIA 書道体験



240309 FIA 留学生と県内企業の合同企業説明会



240310 FCIA クッキングワールドツアー

学内交流活動 On Campus Activities



20230527 Campus Festival Indonesia



20230527 大学祭 インドネシア



20230527 Campus Festival Indonesia



20230527 大学祭 インドネシア



20230527 Campus Festival Kimono Circle



20230527 大学祭 きものサークル



20230527 Campus Festival Malaysia



20230527 大学祭 マレーシア



20230527 Campus Festival Malaysia



20230527 大学祭 マレーシア



20230722 見学旅行 明通寺



20230722 見学旅行 明通寺



20230722 見学旅行 若狭塗箸



20230722 見学旅行 三方五湖レインボーライン



20230807 Mikuni Sunset Beach Swimming



20230807 三国サンセットビーチ海水浴



20230807 Mikuni Sunset Beach Swimming



20230807 三国サンセットビーチ海水浴



20231014 留学生サミット



20231014 留学生サミット



20231014 留学生サミット



20231014 留学生サミット



20240112 21st Ski Tour (SkiJam Katsuyama)



20240112 第21回スキー (スキージャンプ勝山)



20240112 21st Ski Tour (SkiJam Katsuyama)



20240112 第21回スキー(スキージャンプ勝山)



20240112 21st Ski Tour (SkiJam Katsuyama)



20240112 第21回スキー(スキージャンプ勝山)



20240112 21st Ski Tour (SkiJam Katsuyama)



20240112 第21回スキー(スキージャンプ勝山)



20240118 Get-together Party



20240118 留学生と教職員との交歓会



20240118 Get-together Party



20240118 留学生と教職員との交歓会



20240118 Get-together Party



20240118 留学生と教職員との交歓会



20240118 Get-together Party



20240118 留学生と教職員との交歓会



20240118 Get-together Party



20240118 留学生と教職員との交歓会



20240118 Get-together Party



20240118 留学生と教職員との交歓会

学位記授与式

— degree conferment ceremony —





表紙デザイン

Ajay Agarwal (India)

工学研究科 知識社会基盤工学専攻

Hello, world :)

My name is Ajay. I am a Master's student in Information Science at UFukui. I enjoyed designing the cover of the magazine. This was a completely new foray to work in, and I hope you liked the cover :)

In the vibrant dance of form and color, this design presents a harmonious symphony captured upon the canvas of a magazine cover. The theme of this design is "transient gradience". It reflects how the colors around us often mix with the colors of our own life to create a unique tint, filling our transient experience of a place/situation/person with a sense of season - for some cold, for others warm. Just like the transience of season, these feelings change, often for good. It reminds us, to be courageous, brave, and appreciate the rainy days with the same smile and empathy as the cold nights and sunny noons !

I hope that all my fellow peers will appreciate the gradient hues they see in this artwork, and reflect how similarly their stay in Fukui has colored their life and personality in a unique, distinctive, and beautiful shade ! I also hope for the best and wish good luck to my fellow lab mates (and all those students) who graduated this month !



編集後記

依然として感染が続く中でもコロナは5類に移行され、社会は、コロナ禍前に戻るものと戻らないものに分かれつつも、スピードを上げながら日常を取り戻してくる中での2024春号の発行となりました。今年度は、留学生数もコロナ禍前の3分の2程度までは回復したものの、まだまだ少なく、原稿執筆協力者探しには相変わらず苦労しました。忙しい中ご協力くださった編集委員の皆さんには、厚く御礼申し上げます。福井大学留学生のネットワークを絶やさないよう、今後も発行を続けていきますので、卒業生の皆さんも、近況報告と共に写真やメッセージなどをお送りいただければ幸いです。ご協力よろしくお願いたします。

編集委員

Agarwal Ajay

Khazada Amil Mirza,

Mark Patterson Anak Tinggom,

Nor Anisa Binti Mohd Hasri,

Wynsom Filbert Wiyarta,

Gong Shujuan,

Li Dingrui,

Mohd Syahmi Bin Addi Saiful Rizal Voon,

Pargaian Janmajey,

Yoshinobu Torao

福井大学国際センターネットワーク誌「こころねっと」2024年春号
2024年3月31日発行

発行 福井大学国際センター

〒910-8507 福井市文京3丁目9番1号

International Center, University of Fukui

3-9-1, Bunkyo, Fukui 910-8507, Japan

TEL.0776-27-8903 FAX.0776-27-8903

E-mail inbound@ml.u-fukui.ac.jp

<https://www.u-fukui.ac.jp/international/>



格致によりて 人と社会の未来を拓く

国立大学法人



福井大学

UNIVERSITY OF FUKUI